

純粹な喜び

グルマーイの話 1 リーラーヴァティ・スチュワート

2016 年の冬の祭日の期間に、私は 10 代の娘のアリシアと、セーヴァーをささげるためにシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムを訪問しました。クリスマスの当日、シュリー・ニーラーヤでのグルマーイとの素晴らしいサツアングが終わった後、皆はクリスマスの昼食を取るために、アンナプールナー・ダイニングホールに向かいました。

そのすぐ後に、グルマーイはシュリー・ニーラーヤから出て、ニディ・チョークに入って行き、アリシアと私がその近くに立っているのに目を留めました。グルマーイは満面の笑みを浮かべて、私たち2人に、『Spread the joy (喜びを広げよう)』を皆に歌いなさい——「喜びを広げる」ために、と言いました。

アリシアと私がさっそく歌い始めると、グルマーイは、私たちがグルマーイの前を歩き、見事に飾られた食堂の扉を通して入るようにと指示しました。

グルマーイに「喜びを広げる」ように言われたので、私たちは歌いながら、歌声を通してグルマーイの愛が、アンナプールナーにいる全員に伝わるのを想像しました。グルマーイの意図である「喜びを広げる」ことが私の中で、また私の周りで起こっていました。私はまさにこの意図と共に流れているのを感じ、その結果、その場の幸福感は手に取るようで、喜びに満ちていました。

私たちが、アンナプールナーの中央を歌いながら通ると、グルマーイはアリシアと私に、皆が座っているテーブルの間を歩きなさいと言いました。

それから、グルマーイはアリシアに他の歌を歌うように言いました。アリシアは、『I Love You a Bushel and a Peck (あなたがとっても好き)』を選びました。この歌は、彼女がグルマーイのために歌いたいと覚えた歌でした。彼女はグルマーイからもらった「I Love You a Bushel and a Peck」と描かれたTシャツへの感謝の気持ちを表したかったのです。今ここで、アリシアの願いがかない、彼女は思いの丈を込めて歌いました。

するとグルマーイは、オーストラリアから訪問している若い男性を招いて、アリシアと私が歌うのに加わるように言いました。喜びは大きく広がっていき、私たち歌い手はうっとりとして踊りだしました。私たちが歌って踊りながら、テーブルを回っていくと、人々の顔が光に満ちているのが見えました。どんどん多くの人々が歌と手拍子で加わりました。それはあたかも食堂全体と、その中にいる全員が、喜びの大海になったかのようにでした。

私は、グルマーイの喜びが私たち全員を通して流れる生き生きとしたこの体験に、大変感謝しています。

グルマーイ、ありがとうございます。

グルマーイの話 2

ジャヤラクシュミー・レサマ

2009 年の冬、グルマーイのメッセージ、「オーム」の年に、私はセーヴァーをささげるためにシュリー・ムクターナダ・アーシュラムを訪問しました。私は 18 歳でした。

私が帰る日の前日、グルマーイとのサツァングがシュリー・ニーラーヤで行われました。サツァングが終わった後、グルマーイは下のロビーにつながる階段のそばに立って、幾人かの人たちと会話を交わしていました。

グルマーイを見て、私は大きな喜びの波を心に感じました。グルとのダルシヤンを体験したことに感謝しました。私はグルマーイに、翌日帰ると話しました。グルマーイはとても優しく、愛情を込めて、さようならを言いました。それは完璧なお別れに思えました。

私は、翌日の午後遅くにアシュラムを去る予定でした。そして出発の日にグルマーイに会うことはないだろうと思っていました。しかし翌日も、グルマーイとのサツァングがシュリー・ニーラーヤで行われました。そのサツァングが終わると、グルマーイはまったく昨日と同じ場所に立って、人々と話していました。

私がその人たちの中に入ると、グルマーイは尋ねました。「いつ帰るのですか」。その日の午後遅く帰ることを告げると、グルマーイは私に、近くに来るように手招きしました。そして少しの間、私の両手を取りました。それから、この場所は音響が特に良いと言い、皆に「オーム」を合唱するよう言いました。

私たちが全員で合唱し始めると、この神聖な音節は壁に反響して、強力な振動の気泡を作りました。グルマーイは自在に「オーム」を高音から低音で歌いました。グルマーイの声は私の心を突き抜け、「オーム」の振動は私の全身に響き渡りました。私はこの瞬間が終わらないことを切望しました。

私はグルマーイを見て、グルマーイも私を見ていました。この愛の瞬間に、グルマーイに見詰められ、私の思考は溶け、心が大きく広がりました。私たちは時と空間を超えた場所にいました。

私たちが何分間かの「オーム」の合唱を終えると、音の振動は徐々に静かになって、ついに音は静寂に溶け込みました。私たちは、純粋な振動が辺り一面に浸透しているのを味わいました。

その後、この体験について瞑想すると、喜びの涙が私の頬をぬらしました。その時私は、純粋で完全な至福を体験したことに気づきました。

家に戻ってからは、グルマーイと共に「オーム」を歌っているのを思い浮かべることが、瞑想に導くダーラナーとし、瞑想している間は「オーム」をマントラとして復唱して、私は体験したことを消化し始めました。そう、やはりあれは、完璧なお別れだったのです。つまり、私が家に持って帰れるものだったのです。